

上 海 [下]

1991年4月12日 初版第1刷発行

1991年6月28日 初版第2刷発行

著者——クリストファー・ニュー

監修者——藤井省三

訳者——長堀祐造・斎藤兆史・宮尾正樹・古田島洋介

発行所——株式会社 平凡社

〒102 東京都千代田区三番町5

電話 東京03(3265)0471[編集]

03(3265)0455[営業]

振替 東京8-29639

印刷・製本——中央精版印刷株式会社

ISBN4-582-82848-5

NDC分類番号933 四六判(19.4cm) 総ページ424

落丁・乱丁本のお取替は直接小社読者サービス係までお送りください
(送料小社負担)。

Shanghai
by
Christopher New

Copyright ©Christopher New, 1985
First published in Great Britain in 1985
by Macdonald & Co (Publishers) Ltd, London & Sydney

Japanese edition (2nd vol.) ©Heibonsha Ltd, Publishers, 1991
Printed in Japan

目次——上海
^下
v

第三部

第六十二章	五・三〇事件	11
第六十三章	リトル・モスクワで	34
第六十四章	母の墓	41
第六十五章	入帮の儀式	43
第六十六章	パブリック・スクール	45
第六十七章	女生徒ジエニー	50
第六十八章	北伐戦争	53
第六十九章	誘拐	62
第七十章	心の溝	88

第七十一章	ボロディンの息子	92
第七十二章	四・一二反共クーデター	95
第七十三章	別れた妻	122
第七十四章	ユリコ	128
第七十五章	リリーの非難	139
第七十六章	卒業式	150
第七十七章	満州事変	154
第七十八章	リリーの家出	162
第七十九章	反日運動	172
第八十章	上海事変	180

第四部

第八十一章	虐殺	187
第八十二章	老い	195
第八十三章	ジェニーの帰還	201
第八十四章	大舞台にて	206
第八十五章	母と娘	222
第八十六章	警告	239
第八十七章	誤爆	248
第八十八章	アレック、マイケルの帰還	269
第八十九章	ささやかな復讐	299

第九章	潘凱 <small>パンカイ</small> の暗殺	310
第九十一章	乱闘	319
第九十二章	日本軍進駐	332
第九十三章	拘留	338
第九十四章	刑務所から収容所へ	349
第九十五章	中秋節	377
第九十六章	共産軍進撃	386
第九十七章	リリーを待ちながら	391
第九十八章	党幹部	393
第九十九章	デントンの死	400
エピローグ	素梅 <small>スーメイ</small> の死	407

解説……藤井省三

409

装丁 宮城安総

第三部

第六十二章 五・三〇事件

「そう、私はあなたのお父さまをずっと昔から知っているのよ。」ミス・ブルハムは湿って額に貼りつくちぢれた白髪をかきあげながら言った。「お父さまのために祈って差しあげたわ……」そして、不格好な胸にしっかり抱き抱えた賛美歌の本の束をリリーに手渡した。黒い表紙は色あせ、ところどころかびの染みがついていた。「これを机の上に並べてくださる？ 一卓に二冊ずつね。そ

う、お父さまのために祈って差しあげたの。あなたが生まれる前だわ。お父さまが罪深い生活をやめるように祈ったわ。そうして、神様がお遣わしになったのがあなたってわけ。」ミス・ブルハムはほほえんだ。しみだらけで日焼けした顔の青い瞳のまわりにしわがよった。「だから結局、神様は私の祈りを聞き届けてくださったのでしようね……」

リリーは、縁のすり減った古机に本を置く手をふと止めた。また音が聞こえてくる。群衆のさわぐ声だ。彼女

は音のする方をむいて耳を傾けた。くぐもったような遠いつぶやきが、とつぜん怒号のようになった。ずっと近くなつたようだ。

「リリー、あれは何？ またデモかしら。」

「ええ、そうだと思います。」そう言いながら、リリーは背がちぎれ表紙がとれかかった本を置いた。群衆の叫びの後に訪れた静寂を破るのを恐れるかのように、彼女はいつそう注意深く静かに本を置いて言った。

「いったい今度は何のデモなのかしらねえ。」ミス・ブルハムの口調は落ちついてしたが、黒板にむかって賛美歌番号を書き始めると、チョークはひっかくような音をたてて続けて折れた。

リリーはミス・ブルハムの書いた大きく不格好な漢字を見あげた。自分が子供のころ書いたような字だ。おそらく教室にいるからだろう、先週の地理の授業におけるロビンソン先生の言葉を不意に思い出した。

いいですか、皆さん、これは世界の政治地図です。六ページ、いいですか。これはすべての国の領土を表わしています。赤い色の部分がどのくらいあるかわかりますか。それが大英帝国の領土です。中国に

もあるし、地球上のあらゆる場所にあります。アフリカ、いいですか、アジア、西インド諸島、どこを見ても赤い部分があるでしょう。香港、その小さな点のようなどころ、いいですか。誰か香港に行ったことのある人は？ リリー、あなたは行ったことがあるの。よろしい。さあ、いいですか、大英帝国は世界を文明化する偉大な力です、全世界の遅れた地域に、法と秩序と進歩をもたらすのです。イギリス人は手あげて……あなたは駄目よ、リリー、あなたはイギリス人ではないわ。あなたは半分中国人ですもの。

ミス・ブルハムの太い指の圧力でチョークがきしみながら折れていくのをうつろな目で見ながら、その時の屈辱を思い出して今でも頬がはてるのをリリーは感じた。他の女の子たち、とりわけその時手をあげた子たちはくすくす笑っていた。

「いったい何を叫んでいるのかしら？」手を黒板に当たたまま、いぶかしげに顔だけリリーの方にふり向いてミス・ブルハムがたずねた。「なんて言ってるかわかる？」リリーの耳に、低く太い吠えるような叫び声かふたた

び聞こえた。リリーは耳を澄ませ、そして首をふった。「旗が見えます。何か……」彼女はためらった。本当のことを教えるとミス・ブルハムが腹を立てるのではないかとおぼろげに思ったのだ。「何か不平等条約についてのです。」リリーはしどろもどろに答えた。実際に見えたのは「英帝国主義打倒」「不平等条約全面破棄」「治外法権撤廃」といったスローガンだった。苦力たちが清潔な身なりの大学生と一緒に叫んでいる。行商人や店員が笑って歩道から声援を送っている。婦人や子どもたちさえも窓ごしにはほえんで手をふっている。不思議なことに、リリーは自分も叫びだしたい衝動にかられ、誇らしい気持ちに心が震えるのを感じた。私は中国人ではないのに。ロビンソン先生がなんと言おうと、私は半分以上中国人でない。名前は英語名だし、父親はイギリス人だ。母親が何人かということよりもそれは重要な事実だ。それに、どっちにしても、中国服さえ着なければ、私はまったく中国人には見えないのだから……。

「まあ、叫ぶだけ叫んだら終わりでしょうけど。」ミス・ブルハムは平静に言って、悲鳴をあげるチョークを黒板に押しつけ、いためつけながら、ぎこちない奇妙な漢字を書きつけていった。「学校のお友達には孤児の援

助をしようという方はいないの？ 誰かに聞いてみましたか？」

リリーはミス・ブルハムの背を見ながら黙って首をふった。

「お友達には聞いてみたの？」ミス・ブルハムは指に付いたチョークの粉を自分の服で拭きながら、リリーの方に向き直ってたずねた。

そのとたん、リリーは唇を震わせ、泣き出しそうになるのを喉の奥でこらえた。「友達はいません。」思わず彼女はそう口に出していた。「友達はあなただけです。」

「馬鹿をおっしゃい。そんなことあるはずないわ。」グレーの服で手を拭きながら、ミス・ブルハムはきつぱりと言った。「イエス様はすべての人々のお友達。さあ、子供たちを呼ぶ時間よ。阿囃アハツに鐘を鳴らすように言ってくださいる？」

子供たちがつまらなそうな顔でおとなしく歌っている間中、リリーの耳には遠くのデモのうねりが聞こえていた。低いつぶやきが突然ふぞろいな咆哮に変わり、ゆっくりと静まってまた大きくなると、ミス・ブルハムの弾くリードオルガンのすすり泣くような音と子供たちの歌声はかき消されてしまった。子供たちは好奇心いっぱい

に一齐に格子窓の方を向いた。ミス・ブルハムは机の間をまわりながら、お祈りの手の組み方を幼い子供たちに教えてまわり、自分もひざまずいて手を組んだ。リリーも祈った。今度こそ最後の一步を踏み出す心の強さが持てるように。目を閉じてイエス様の姿を思い浮かべる。イエス様は背が高く、白い皮膚で、ミス・ブルハムと同じ淡青色の瞳だ。イエス様の目にはもつと強い光が宿っているけれど、祈りを終えてリリーは考えた。自分がキリストを白人として想像したということは、自分が本当に中国人ではなく、イギリス人だということの意味するのだろうか。

子供たちを送り出すと、二人は机の間をまわって賛美歌の本を回収した。孤独な空想の中では何度もおさらいしているが、実際に口に出したことの無い言葉を思い出しながら、リリーの心臓は早打った。きつと今日も言いだせないだろうと彼女は思っていた。ところがその言葉は、とつぜん息つく間もない速さで彼女の口から飛び出していた。「ミス・ブルハム、私、洗礼を受けたいと思っ

ていると思うんですけど。」
「思っていると思うんです？」ミス・ブルハムは鼻を鳴らしてほえんだ。「どうということなの？」

「つまり洗礼を受けたいということです。つまりイエス様を信じているということです。」口に出してしまふと、いく晩もいく晩も考え続けたことなのに、なぜか自分の言葉ではないように、自分と関係ない些細なことにのように感じられた。しかしいづれにせよ、告白はなされた。それは事実だ。もう後もどりはできない。

「そうなるようにお祈りしていたのよ。」ミス・プルハムは驚いた様子もなく、出した手紙の返事を受け取ったかのように、満足げにおだやかに言った。「お友達は私だけじゃないって言ったでしょう。イエス様もあなたのお友達なのよ。」彼女は本の束の臭いに顔をしかめた。「明日これをみんな虫干ししなければね。みんな腐ってしまわ。さあ」そしてほとんど口調を変えずに言った。「洗礼を受けるとしたら、御両親にお話ししなければ。」

「いけません！」

「それは駄目、」ミス・プルハムはきつぱりと言った。「お父さまから後で文句を言われたくないわ。お母さまにもね。それに、あなたはお二人のお手本になるでしょう。どっちにしても、私はお父さまにいくらか御寄付をお願いしに行くつもり。お金のことをどうしたらいいか、ずっと神様の啓示を待っていたの。あなたが洗礼を受け

たいと言った時、私には神様が私に道をお示しになったのだとすぐわかったわ。」

「母は許してくれませんか。」リリーは必死に抵抗した。「母に言ったら、きつと許してくれないでしょう。内緒でできないんです。つまり、母に言わずにすませたいんです。」

「あなたがキリストによって生まれ変わったとお伝えするのに？」ミス・プルハムは信じられないといった口ぶりであつた。学校で賞をとった報告をするのと同じだと思つているかようだった。「もちろんお母さまは許してくださいるわ。決まつているじゃないの。」

険しい目つきになつてこわばつた母親の顔を想像し、リリーは力なく反論した。「今すぐでなくてもいいですよ。」

「もちろん今すぐによ。思い立つたが吉日。お父さま、お家にいらつしやるかしら。」ミス・プルハムは、いつも服にピンで留めていた時計を見ながら言った。

リリーは自分のしでかしたことの恐ろしさに気づいた。神、救済、神との魂の合一、こうしたことへの渴望は、自分一人の想像の内にあつてはとも豊かな感情のように思われたのだったが、いまや風の中のぼろきれのよう

に動揺していた。だがもうどうしようもない、口にしてしまった以上、もはや後もどりはできないのだ。

門から通りに出て、リリーはミス・プルハムの後をおとなしく歩いた。きつと何か邪魔がはいる、彼女は心の中でそう期待した。途中でデモ隊に出くわして、ミス・プルハムは今日のところはあきらめるだろう……。

群衆の叫びは段々大きくなって、もうほんの数ブロックしか離れていないように思われた。絶え間ない怒号はますます激しく、一万人もの喉から上がる呐喊の声のように聞こえた。リリーはかすかな不安を感じたが、本当に恐ろしいのは両親がミス・プルハムと会うことの方だった。ミス・プルハムは首をのばしてデモの音に耳を傾けていたが、やがて肩をすくめてほほえんだ。

「母は私がおここに来ていることを知りません。」リリーはためらいがちに言った。「母は私が学校に残っていると思っっているんです……」

「神様のお手伝いをしているのに、お母さまにうそをついたのではないでしょうね。」ミス・プルハムはリリーを軽くたしなめるように言った。

「いいえ、ただ話していないだけです。」リリーはいいわけがましく答えた。

「それじゃ、これからお話しに行きましよう。神様のお仕事をするのを恐れてはいけませんわ。」

通りを歩き出すとすぐに、あたりに漂う不吉さと不気味さの原因がリリーにはわかった。通りが空っぽなのだ。二人の他に人影はなかった。台風が近づいた時のように商店は扉を閉じていた。露天商も屋台を片づけて姿を消していた。

「人力車を雇いまししょうか。」ミス・プルハムはその雰囲気気に気づいていない。

リリーは答えるかわりに通りを指で示した。

「あら、人力車までストライキじゃないでしょうね。」ミス・プルハムはあわてた様子も見せず肩をすくめた。「それじゃ、テクシーね。車夫たちときたらお金のことばかりで、魂のことは考えないんだから。」

二人は日陰を選んで歩いた。商店は閉じられ、運河はよどんでいた。側溝で犬が舌をだらりと出してあえいである。片づけられないごみの山には、鼠がわがもの顔に走りまわっている。ミス・プルハムは賛美歌を口ずさみながら歩いた。かすかに息があえぎ、汗で肌が光ったが、暑さは気にならないようだった。顔に快活な微笑を浮かべ、まるで自分の目の及ぶところには必ず赤ん坊が打ち